

斎藤正二と牧口常三郎研究

——回想・方法・継承——

塩原 将行・牛田 伸一・岩木 勇作・伊藤 貴雄

シンポジウムの趣旨

伊藤 それでは、「創価教育論」の授業を始めます。これまで牧口常三郎の思想について何度か講義が行われてきたと思いますが、今回は、改めて、この「創価教育論」という授業で扱っている研究内容を、そもそもどのような方法で研究するのかという点に焦点を当て、シンポジウム形式で考えてみたいと思います。

本日のテーマは「斎藤正二の牧口常三郎研究」です。ご登壇いただく皆様は、さまざまな意味で牧口研究を牽引してこられた現役の研究者です。はじめに、本日の登壇者をご紹介します。

まず、塩原将行さんです。創価教育研究の客員研究員であり、『評伝 牧口常三郎』という決定版とも言うべき牧口常三郎の伝記を著された方です。

次に、牛田伸一さん。教育学部教授、教育学研究科長であり、『教育的教授論における学校批判と学校構想に関する研究』など多くの著作があります。

続いて、岩木勇作さんです。東洋哲学研究所で研究員をされており、『近代日本学校教育の師弟関係の変容と再構築』というご著書があります。

私は文学部教員で、図書館長をしています。専門は哲学・思想史です。最近、『哲学するベートーヴェン』という本を出しました。今日は司会を兼任します。

それでは本題に入ります。今日は「斎藤正二」という人物に焦点を当てます。斎藤正二は牧口研究の第一人者と言われた方ですが、創価学会の会員ではありません。著名な教育学者で、第三文明社版の『牧口常三郎全集』を編集した人物です。1925年生まれで、今年はちょうど生誕100周年にあたります。2011年に85歳で亡くなられ、没後すでに15年近く経過し

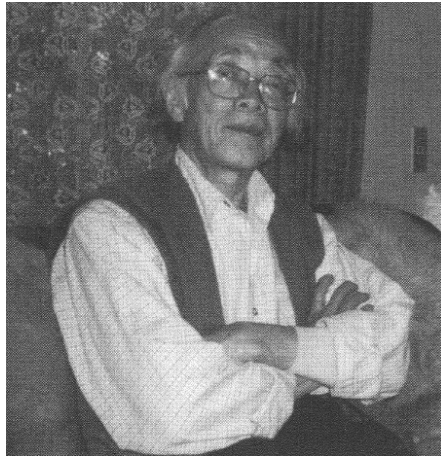
Masayuki Shiohara (創価大学池田大作記念創価教育研究所客員研究員)

Shinichi Ushida (創価大学教育学部教授)

Yusaku Iwaki (創価大学)

Takao Ito (創価大学文学部教授)

本稿は2025年10月20日に大学科目「創価教育論」で行われたシンポジウムの記録である。本稿の作成に際して、上原淳司氏より校閲ならびに有益な助言をいただいた。



斎藤正二氏近影

『創価大学学生平和論集 第三集』（創価大学学生平和論集編集委員会編）所収

ています。我々は、さまざまな形で斎藤正二の研究上の指導を受けてきた世代でもあります。

斎藤正二略歴

伊藤 まず略歴をご紹介します。斎藤正二は1925年（大正14年）に八王子で生まれ、東京大学文学部を卒業しました。長年にわたり短歌評論を手がけており、日本文学史や短歌史の分野でも名前が挙がる研究者です。『現代日本詩人全集』など、数多くの編集にも携わりました。代表作としては、『「やまとだまし」の文化史』や『日本の自然観の研究』などが挙げられます。また、アラン、ランボー、マーク・トウェイン、ラフカディオ・ハーンなど、英仏文学の翻訳も行っており、たぐいまれな語学力を持っていました。『斎藤正二著作選集』という著作集も刊行されています。

斎藤は半世紀以上にわたって牧口常三郎研究を続けた人物です。補足すると、名古屋大学に提出した教育学博士論文が『日本の自然観の研究』です。この著作では、日本人が古来より自然を愛してきた民族であるという通念を問い直し、日本社会が歴史的に環境破壊を繰り返してきた事実を、文献的に明らかにしました。その問題意識は、水俣病や四日市ぜんそくといった公害問題とも深く結びついており、「自然を愛する」とは本来どういうことなのかを鋭く問い直しています。当時、柳田國男や南方熊楠といった著名な学者の著作に連なる研究として、高く評価された名著です。

斎藤の代表的な研究の一つに、『日本人と桜』という著作があります。桜は日本固有の花だと考えられがちですが、斎藤はその起源が中国、さらに遼ればヒマラヤ付近に由来し、桜は本質的にグローバルな存在であることを強調しました。この研究は桜の文化史研究を代表する業績として、現在でもよく引用されています。

斎藤は日本文化史の研究者であると同時に教育学者でもありました。彼の教育思想史研究

は、従来の教育学が見落としてきた人物を、一流の教育者として再評価する試みでした。たとえば、法律家のモンテスキューや発明家のフランクリンなどを教育思想史の文脈で再評価しています。その中に、牧口常三郎研究も位置づけられました。また、翻訳家・書評家としても知られています。今年放送されている朝の連続テレビドラマ「ばけばけ」では、ラフカディオ・ハーン、すなわち小泉八雲が取り上げられていますが、斎藤は『ラフカディオ・ハーン著作集』の編集・翻訳もしています。『怪談』の翻訳でも知られています。

英米文学の分野では、バイロン、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィン』や『トム・ソーヤの冒険』なども、斎藤の翻訳で角川書店から刊行されました。なぜこのような学者が牧口研究に取り組んだのかについては、あとのディスカッションで触れられると思いますが、牧口研究において画期的だったのが『若き牧口常三郎』です。牧口が15歳に至るまでの人生を扱った著作で、約700ページの大著です。資料に基づく実証的研究とはどういうものであるかを明確に示し、それまで伝承や噂に依拠していた牧口像を一つ一つ検証し、刷新しました。

斎藤は亡くなる直前まで研究を続け、未刊行論文が約30本残されていましたが、それらは『牧口常三郎の思想』として一冊にまとめられました。これも約700ページ以上の大著です。また、『牧口常三郎全集』（第三文明社、全10巻）を編集し、『人生地理学』や後期教育論集など、重要な巻の校訂・注釈・解題を斎藤が担当しました。この全集自体も、斎藤が長年収集してきた牧口の著作コレクションを基礎に編まれたものです。それ以前は、牧口の著作がどれほど存在するのかを正確に把握している研究者はほとんどいませんでした。

塩原さんをはじめとする後進の研究者が牧口の未発見の論文を発見できたのも、斎藤が切り拓いた実証研究の道筋があったからです。斎藤が担当した『牧口常三郎全集』の脚注では、本文中の語句一つ一つについて、意味や用法を詳細に注記しています。斎藤は漢和辞典の編集にも携わっており、日本語の出典を徹底的に調査しています。本文で説明しきれない内容は補注としてまとめられ、当時の日本語における語義が資料に基づいて解説されています。たとえば『人生地理学』（上）では、全体約600ページのうち、本文が約330ページ、残りの約270ページが斎藤による注釈です。

さらに、紀伊國屋書店の映像シリーズ「学問と情熱」（第33巻）では、福沢諭吉や津田梅子の巻と並び、斎藤正二の監修による「牧口常三郎」巻が制作されました。皆さんもこの授業の冒頭で視聴したと思いますが、英語版やスペイン語版も制作され、海外で牧口を紹介する際の重要な資料となっています。制作からすでに20年ほどが経過していますが、現在も最良の牧口入門の教材です。

以上、簡単ではありますが、斎藤正二という学者の研究業績とその意義の一端をお話ししました。

ここからは、本日は事前に「この点について話そう」といった打ち合わせや、シナリオ、いわゆる仕込みは一切行っていません。さまざまな意味で斎藤正二から学問的・研究的な指

導を受けてきた私たちが久しぶりに集まり、牧口常三郎研究が、斎藤以前と斎藤以後とで、どのように変わったのか、そして今後どのような牧口研究を目指していくべきなのかについて、率直にディスカッションしたいと思っています。

以上で、私のイントロダクションを終わります。

斎藤との出会い

伊藤 それでは、どこから始めましょうか。まず、今日の参加者の中で最初にお会いになったのは、牛田さんでしょうか。斎藤正二は、長年にわたり諸大学で教授を務めたあと、最後に創価大学の教授となりました。その経緯としては、創価大学教育学部に大学院が設置される際、大学院では博士号を持つ教員でなければ教育にあたれないという条件があり、そのために斎藤が招聘されて、教育学部の教授に就任したという事情があります。牛田さんは、ちょうどその時期に教育学部に入学されたのですね。

牛田 そうですね。私が入学したのは1992年で、伊藤先生とは同期になります。

伊藤 僕と牛田さんは同い年なのですが、学生の皆さんからすると、もうずいぶん昔の話ですね。1992年と聞いて、「いつの時代だ」と思う方も多いのではないのでしょうか。

牛田 斎藤先生に初めてお会いしたのは、1994年の秋学期か、あるいは春学期だったと思います。

伊藤 ということは、大学3年生くらいのときですね。

牛田 はい。大学3年生のときに、斎藤先生の「教育哲学」の授業を履修しました。3年生になると専門科目に分かれていきますが、そのタイミングで初めてお会いしたことをよく覚えています。

伊藤 塩原さんは、何年頃でしたか。

塩原 はっきりとした年は覚えていないのですが、八王子駅前に東急スクエアができた年であることは間違いありません。

伊藤 今のオクトーレというビルですね。ああ、思い出しました。駅前にこのビルができる際に、塩原さんが市民向けの大学講座を企画されましたよね。

塩原 はい、そうです。創価大学として初めて、大学の外で市民に開かれた講座を行おうということになり、東急スクエアの中で開催することになりました。その際、ぜひ6月6日に斎藤先生にお願いしたいということで、斎藤先生の子安町のお宅を訪ねたのが、最初の出会いです。

伊藤 90年代の終わり頃でしょうか。

塩原 はい、その頃だったと思います。

伊藤 私はおそらく、牛田さんの翌年ですね。1995年だったと思います。大学4年生のときで、私は文学部でしたから、本来であれば教育学部の授業を取る必要はなかったのですが、自由聴講で履修しました。有名な先生でしたし、やはり非常に博学で、学問的には厳しい方でした。私は、自分を学問的に鍛えてくれる人に出会いたいと思っていました。今では、あのよう

な教育の仕方はあまり行われたいかもしれませんが、自分の勉強がまだまだ足りないということを感じたくて、圧倒的に打ちのめされるような「巨人」に出会いたいと考えていたのです。そのとき、友人から「それなら斎藤正二の授業を取るといい」と勧められました。ですから、1995年ですね。岩木さんは、いつ頃でしょうか。

岩木 私は、牛田先生や伊藤先生の10年ほど後になります。2004年か2005年頃だったと思います。私は通信教育課程出身で、当時は働いていたのですが、アルバイト先の先輩から斎藤正二という人物を教えてもらい、その論文を読み始めました。読んでみて、この人はすごいと思い、ぜひ実際に会ってみたいと考えるようになりました。

斎藤正二が担当している授業を自分で調べて、2回ほど、いわば潜りで聴講しに行きました。多少質問をしたかもしれませんが、個人的な面識という意味で言えば、直接お会いできたのはその頃です。その後、意思疎通ができるようになり、私のことを認識していただいて、きちんと話ができるようになったのは、さらに2、3年ほど後、2008年頃だったと思います。

伊藤 ということは、もう晩年の頃ですね。80歳を超えておられて、当時は非常勤講師として80歳まで教えておられましたよね。

岩木 その、本当にぎりぎりのところに滑り込んだ、という感じですね。

牧口への傾倒（牛田の回想）

伊藤 ということで、今のところでは、牛田さんが一番関わりが古そうですね。まず牛田さんから、思い出話のようなものをお願いしたいと思います。

牛田 そうですね。どこからお話しすればよいのか、とても難しいのですが、まずは人となりの印象からお話しします。斎藤先生の講義は、一言で言えば、非常に緊張感を伴うものでした。講義中、しばしば強い言葉を用いられることがあり、その意味では「厳しい」「切迫感のある」語り口であったと言えると思います。ただし、それは決して感情的に学生を叱責するというようなものではありませんでした。

もちろん学生に対して注意されることも、まれにはありましたが、それ以上に、世の中そのものに対して怒っておられたという印象が強いです。世の中の在り方について、あれほど強い問題意識と感情をもって語る講義は、当時も、そして今でも、ほとんど聞いたことがありません。

斎藤先生は、必ずその週の新聞記事を取り上げ、それを素材にして教育や哲学の講義をされていました。私自身、その影響を強く受けており、現在でも同じような授業を行うことがあります。社会で起きている具体的な出来事を取り上げ、そこに潜む不正や、あってはならない事態に対する怒りを、真正面からぶつける。その一方で、その怒りは決して感情論ではなく、講義の中で明確な根拠を示しながら展開されていました。大学の講義というものが、社会の現実と深く結びついているのだということを、身をもって教えていただいたという記憶が、今も強く残っています。

大学とは、世の中の問題に目を背ける場所ではなく、むしろその問題から思考を紡ぎ出し、ある種の学問的・科学的知見として消化していく場なのだ、ということ、斎藤先生はご自身の生涯を通じて体現された方だったのであろうと、今振り返って思います。先ほど伊藤先生が紹介された『「やまとだまし」の文化史』も、私自身、読むのに非常に苦労しましたが、冒頭から、日本社会が右傾化していく状況への強い問題提起がなされていました。

伊藤 ご自身がお兄さんを戦争で亡くされているので、軍国主義に対する怒りは、晩年に至るまで非常に強いものがありましたね。

牛田 そうした背景も含めて、先生の姿勢は私に非常に大きな影響を与えてくださいました。もう一つ、少し思い出話になりますが、学生に対しても、時に厳しく怒っておられました。これは強く印象に残っているエピソードです。斎藤先生は、創価大学に来ていながら、大学教員を含めて牧口常三郎に関心を持つ人がほとんどいないことを、いつも非常に残念がっておられました。「手に取ったことすらない」と、よく嘆いておられたのを覚えています。

先生には大学の講義用の教科書として出版された著作があるのですが、自身の授業ではそれを用いず、教育哲学の授業では牧口の『人生地理学』をテキストとして、一文一文を丁寧に読みながら解説して下さっていました。当時は、私自身も無知で、そのありがたさが分かっていませんでしたが、今思えば、本当に貴重な時間だったと感じます。しかし残念なことに、当時の学生の多くは、牧口常三郎について、「名前は知っている」「すごい人らしい」「信仰へ導く人」といった程度にしか理解しておらず、学術研究の対象として捉える人は、ほとんどいませんでした。

そのため、『人生地理学』を読む授業であっても、教科書として購入してくる学生がほとんどいなかったのです。それを知ったとき、斎藤先生は大変お怒りになりました。なぜそれに気づかれたかということ、後ろの席で「内職」をしている学生がいたからです。今で言うスマートフォンは当時ありませんでしたから、「内職」といえば、別の勉強をしているか、あるいは別の新聞か何かを読んでいる、といった光景でした。

斎藤先生はその学生を見て、「君は何をしているのか。牧口を読む時間でしょう」と、最初は比較的穏やかに声をかけました。そして「では、そこを読んでみなさい」と言ったところ、その学生が『人生地理学』すら持っていないことに気づかれたのです。先生は少し表情を曇らせ、「私の本を買えとは一言も言っていない。しかし、牧口の本すら買えないのか」と叱責されました。さらに周囲を見回して、「君はどうなのだ」と問いかけると、受講者の多くが持っていない様子でした。それが分かった瞬間、先生の怒りは最高潮に達しました。

私は「この授業はどうなってしまうのだろう」と不安になりましたが、ほとんど全員が持っていないことを確認したところで、先生はそれ以上怒ることをやめ、その日の授業は静かに終わりました。

そして、私にとって残念だったのは、その翌週の出来事です。受講者が大幅に減っていたのです。おそらく、怒られたことに対する抗議だったのだと思います。

斎藤先生は、『人生地理学』を20冊ほど抱えて、研究室のある5階から一度教室に降り、また研究室に戻って、さらに20冊ほど持ってきて、再び教室に現れました。そして開口一番、「皆さんが買わないので、私を買えばいいということが分かりました」とおっしゃいました。『人生地理学』は一冊3000円ほどだったと思いますが、それをすべて購入され、「授業が終わるまで貸し出しますから、これを使って読みなさい」と言ってくださったのです。

さらに驚いたのは、その後の話です。斎藤先生のお宅にはチューリップ畑があり、毎年、雑草取りをしなければならないそうです。「そのアルバイトをしに来なさい。アルバイト代を出すから、そのお金で『人生地理学』を買いなさい」と学生に話していました。不思議な先生だと思いつつも、私は本当に誠実な方だと感じながら授業を受けていました。

おそらく、その週から履修を取り消した学生たちは、先生のことを「かなり変わった先生」「怖い老人」としか思わなかったかもしれません。それはとても残念なことですが、私にとって斎藤正二という人物は、言葉にはうまく表現できないのですが、とても大事なことを伝えてくれた先生でした。

伊藤 斎藤正二は50代のときにがんを患いました。手術後に医者からは、余命5年と告げられたそうです。それでも彼は、文字どおり命をかけて『牧口常三郎全集』の編集に取り組んでいました。全集の編集には非常に時間がかかり、その作業とともに、結果的には自身の寿命も延びていったと回想しています。実際、亡くなった時には86歳でした。命と引き換えに、誰よりも牧口研究を続けた人物でした。

しかも、斎藤正二は創価学会の会員ではありません。当時、今から50年ほど前の状況を考えると、「牧口常三郎」という名前は、「創価学会初代会長」というイメージと強く結びついていました。斎藤はそれまで角川書店や創元社など、さまざまな出版社から本を出してきた研究者でしたが、牧口研究に取り組むことで、「お前は創価学会に入ったのか」といった言葉を周囲から投げかけられ、さまざまな不利益も受けたと聞いています。それでもなお、牧口常三郎に対する深い尊敬の念を失うことなく、研究を続けました。

そうした中で、創価大学に招聘された際には、「創価大学の学生と一緒に牧口を読もう」と楽しみにして来られたのです。しかし実際に授業が始まると、学生の多くは牧口の本を買わず、読もうともしない。非常に悲しまれた。しかし、そうであれば、「自分が買って貸し出せばいい」と考えた。そのような方だったのだと思います。研究者としての業績もさることながら、教育者としても傑出していました。

学問の姿勢（塩原の回想）

伊藤 では、塩原さんはいかがでしょう。塩原さんは多くの研究上のやり取りをされたと思いますが、何か思い出があればお願いします。

塩原 斎藤先生のお話をする前に、なぜ私自身が牧口常三郎について研究するようになったのかを、少しお話したほうがよいと思います。私は創価大学の2期生で、大学院は創価大学大

学院の法学研究科に進み、その後、大学職員として勤務してきました。

2000年前後という時期は、日本の大学にとって、「これからは全入時代になる」「大学というものが大きく変わっていく」と盛んに言われていた時代でした。そのような状況の中で、創価大学はこれからどのような大学になるべきなのか、いわゆる建学の精神に込められた意味とは何なのか、ということが、私自身、常に気になっていました。

そうしたことを考える中で、あるときふと、「なぜ創価大学の目の前に東京牧口記念会館があるのだろうか」「もしかすると、牧口先生は八王子にいらっしやったことがあるのではないか」という疑問を抱くようになりました。

そんな折、名古屋を訪れた際、ふと一枚の写真に目が留まりました。それは、高尾山の頂上で牧口先生と子どもたちが写っている写真でした。関西出身の方であれば「たかお」と聞くと京都の高雄山を思い浮かべるかもしれませんが、私は八王子に住んでいますので、「これは高尾山だ、つまり八王子だ」と直感的に思いました。そして、「この写真はいったい誰が提供したのだろう」と考えました。

以前私は通信教育部を担当していたので、ある通教卒業生のことを思い出しました。そこで、その方に「この写真を提供したのはあなたか」と尋ねたところ、そうだという返事が返ってきました。ただし、創立者に報告するにあたって、万が一にも誤りがあってはならないと思い、実際に自分で高尾山に登り、現地を確認しました。駆け足で登った記憶がありますが、間違いないと確信したうえで、「牧口先生が八王子にいらっしやっていました」という報告を創立者に行いました。

ちょうどその一週間後に、大学祭、いわゆる創大祭がありました。その場で創立者は「今日は臨時ニュースを申し上げます」と切り出され、一つは福島県で創価大学の研究チーム――私も参加していましたが――が古代の銅鏡を発見したという話、もう一つが、「牧口先生が八王子にいらっしやっていた」という話でした。

いずれにしても、創立者がいかに牧口先生を大切にされているかを実感し、私はせめて牧口先生に関することを少しずつでも報告していこうと思い、それ以降、仕事とは別に、地道に調査を続けてきました。その一つ一つの報告に対して、創立者が本当に喜んでくださったことから、牧口先生への深い思いを強く感じました。

そうした流れの中で、先ほども触れましたが、八王子駅前に市民と大学をつなぐ交流拠点ができることになりました。創価大学として初めての試みでしたが、その最初の企画として、牧口先生の生誕日である6月6日に、斎藤先生に講演をお願いしようということになりました。ちょうどドチューリップが咲いている季節でしたが、そのお願いのために斎藤先生のお宅を訪ねました。

そこではじめて斎藤先生とお会いしたのですが、講演当日の冒頭の言葉には、正直、啞然としました。6月6日の講演であるにもかかわらず、「6月6日は牧口先生の誕生日ではありません」という言葉から話を始められたのです。実は、旧暦であるため、現在の暦とは異な

なのだ、という説明でした。そこから、「学問とは、正確に学ぶことが何よりも大切なのだ」という話をされたことが、非常に強く印象に残っています。

また、話は前後しますが、斎藤先生のお宅を初めて訪れた際に、私は「創価教育とは、いったいどういうことですか」と質問しました。そのとき斎藤先生は、「創大生の悪いところは、自分で考えずに、すぐ人に尋ねるところだ」と言われ、「創価教育とは、考えるということだ」と、はっきり言い切られました。一見すると冷たく、突き放したような言い方でしたが、後から振り返ると、「創価」そして「創価教育」の根底には、「考えること」があるのだということをお教えくださったのだと思います。

それが、私にとっての斎藤正二という人物の第一印象でした。懇談の後、ご自宅のチャーリップ畑を案内してくださったことも、今では懐かしい思い出です。

二育論について（岩木の回想）

伊藤 岩木さんはいかがですか。

岩木 そうですね。先ほども少し触れましたが、私が受講したのは、おそらく最終講義か、特別講義のような位置づけの授業だったと思います。内容は、ショーペンハウアーの読書論、あるいはD・H・ロレンスの恋愛論を通して教育を語る、といった趣旨の講義だったと記憶しています。それを受講して、非常に感動しました。その前から斎藤先生の論文を読んでいて、「この人がいるなら、創価大学に進学したい」と思っていたのです。

伊藤 2005年度の最後の講義ですから、2006年の1月ですね。そのとき、岩木さんは通信教育部生でしたか。

岩木 通信教育部……学部研究生だったと思います。

伊藤 では、そこから創価大学に進学しようと思ったのですか。

岩木 そうですね。進学したいと思ったのですが、ちょうどそのタイミングで斎藤先生が退職されてしまいました。

伊藤 では、最後の講義を、自由聴講したということですね。

岩木 そうなります。ただ、斎藤先生が進学の大きな動機であったことは確かですが、それだけではなく、「創価大学で学びたい」という気持ち自体も消えなかったもので、そのまま進学しました。

斎藤先生の論文は本当に面白いのです。とりわけ「二育パラダイムと三育イデオロギーの間」という論文は、非常に印象的でした。これは教育をどのように区分するかという問題を扱っていて、日本の伝統的な教育観では、知育・徳育・体育という三育が一般的です。現在でも、この考え方は、ある意味で基本的な枠組みとして残っていると思います。

ところが斎藤先生は、この三育という区分そのものを「イデオロギーだ」と言い切ります。そして、知育と体育という二育で捉えるほうが、むしろ合理的ではないか、さらに牧口常三郎も同様の考え方をしていた、という議論を展開するのです。三育という枠組みが、いかに

イデオロギーに満ちたものであるかを論証していくその論文を読んで、「こんなことが書けるのか」と、まさに目から鱗が落ちる思いでした。

その論文をきっかけに、私自身も斎藤先生に引きずられるようにして、日本教育史という分野に入っていったと言えます。修士課程に進学し、1年目は、斎藤先生がいなくても何とかやっていけたのですが、1年目が終わる頃になると、どうしても何らかの形で斎藤先生と接点を持ちたいという思いが強くなりました。単に授業を受講しただけで、特別に声をかけられたわけでもありませんでしたし、完全にこちらの一方的な思いだったのですが、それでも「何とか指導を受けたい」と考えました。

そこで、斎藤先生のご自宅宛に手紙を書きました。「何でもやります」と、かなり熱烈な内容だったと思います。当時も働いてはいましたが、新聞社での仕事をはじめ、大工仕事など、いろいろなことをしていたので、「家の手入れでも、屋根の修理でも、何でもしますから、とにかくお近くに置いてください」といった趣旨の手紙を、直接お送りしました。

すると、「岩木さんという方から手紙をもらったのだけれども、知っていますか」という確認が、伊藤先生のところに入ったようです。

伊藤 たしかご自宅に伺った折に、「岩木さんという方から手紙をもらったのだけれど、ご存じですか」と聞かれて、私は「本当に真面目に学ぼうとしている方で、斎藤先生の本もたくさん読んでいます」とお答えしました。すると、「では、一度連れていらっしやい」という話になり、それでお連れしたのです。

岩木 そこから伊藤先生が間を取り持ってください、斎藤先生のご自宅を訪ねるようになりました。退任後に図書を寄贈される際のお手伝いなど、さまざまな作業を通じて、直接お話しする機会をいただきました。斎藤先生との出会いは、そのような形だったと思います。

牧口とカント（伊藤の回想）

伊藤 斎藤正二は、本当に多くの人材を輩出しました。もともとシリーズ本「世界子どもの歴史」など、西洋教育史に関わる研究も数多く手がけておられたので、その系譜では、牛田さんが西洋教育史を代表するお弟子さんになられたと言えるでしょう。また、斎藤先生は日本教育史の大家でもありましたから、その点では岩木さんが輩出された。そして、牧口常三郎の評伝的研究、すなわち実証的な資料に基づいて牧口先生の生涯を丹念に追う研究という意味では、塩原さんが育ってこられたわけです。他にも、塩原さんの同級生で、牧口研究の本を多く出された古川敦さんという学者もいらっしやいますし、長く教授を務めたので多くのお弟子さんがおられます。

私は文学部で、ある意味では一番直接の関係が薄かった立場ですが、今でも強く印象に残っている出来事があります。1995年、私が大学4年生だったとき、卒業論文に何を書こうか迷っていました。そのとき、文学部のゼミの先生から「卒業論文では、カントくらいはやっておいた方がいい」と言われ、岩波文庫で『純粹理性批判』を読んでいました。4年生の春か秋だっ

たと思います。

当時、斎藤正二の授業は30人ほどが履修していました。闘病しておられたので非常に痩せておられましたが、教室の中をぐるぐると歩き回りながら講義をされていました。あるとき、たまたま私の席の横に来られて、机の上の『純粹理性批判』を見られて、「君はカントを読んでいるのか」と声をかけられました。私が「卒業論文でカントについて書こうと思っています」と答えると、「カントを読むと感動するよね。平和主義で、理性を愛している」とおっしゃって、情熱的にカントについて語られました。それ以降、覚えてくださったのです。

私は、「なぜこの方は、カントにここまで反応されるのだろうか」と思いました。たまたま机の上に置いていた岩波文庫を見ただけで、ここまで話が広がるのかと驚いたのです。しかし、後になって『若き牧口常三郎』や『斎藤正二著作選集』を読み進めるうちに、斎藤がカントについて深い造詣を持っていることを知りました。斎藤は、牧口常三郎という人物を、「カント哲学に本気で取り組んだ、日本における希有な思想家」と捉えていたのです。

その後、私は『牧口常三郎の思想』の編集作業をお手伝いすることになり、その過程で多くのことを教えていただきました。たとえば「価値創造」という言葉は、カント哲学に由来するものであり、『人生地理学』に登場する「世界民」、すなわち「世界市民」という概念も、元をたどればカントから来ています。さらに言えば、人間と地理との関係をグローバルな視点で捉えようとする『人生地理学』というプロジェクト自体が、カント系統の近代地理学に着想を得たものなのです。

カントは哲学者でありながら、教育学や地理学といった新しい学問を大学のカリキュラムに導入した最初の哲学者でした。一方、牧口常三郎は、教員として出発し、地理学者となり、教育学者へと歩みを進め、「価値論」という哲学書を書き上げました。そして最後には獄中でカント哲学を精読しました。哲学から教育学・地理学へと進んだカントと、教育から地理学、哲学へと進んだ牧口は、一見すると逆の道を歩んでいるようですが、人間の理想、平和、成長といった問題を真剣に考え抜いた結果、非常に近い思考に到達しているのだと、斎藤は考えていました。その視点から、牧口常三郎がなぜ「価値創造」という概念に行き着いたのかを、カント哲学から捉え直していたのです。

その意味で、私自身も、日本のカント研究者の端くれとして、斎藤正二の研究に強く導かれた一人だと思っています。もっとも、専攻が異なっていたため、大学院進学後しばらくは、斎藤との直接的な接点はありませんでした。ところが、修士論文を書く25歳頃、私は自分の研究テーマに完全に行き詰まっていた。ショーペンハウアーという哲学者について論文を書いていたのですが、どこに活路を見いだせばよいのか、悩んでいたのです。

そんな折、八王子の古書店で、偶然斎藤正二と再会しました。1998年頃と記憶しています。八王子にお住まいで、よく古本屋に通っておられました。久しぶりにお会いしたにもかかわらず、私のことを覚えておられ、「あなたは伊藤さんだよ。カントをやっていたよね。今は何をやっているの」と声をかけてくださいました。私が「今はカントからショーペンハウ

アーに移りました」と答えつつ、正直、叱られるのではないかと思います。「なぜカントをやめたのか」と言われるのではないかと身構えたのです。

ところが、斎藤はそうではなく、間髪を入れず「それは素晴らしい」と言ってくださったのです。「19世紀において、ロマン主義やナショナリズムへと時代が傾く中で、カント哲学の理念を正しく守ろうとしたのがショーペンハウアーだ。あなたは、その研究をきちんとやり遂げなければならない」と、力強く励ましてくださいました。私は深く感動しました。その後、斎藤が『牧口常三郎全集』第1巻の『人生地理学』に付した注釈を読んで、彼の西洋哲学への造詣の深さに打たれました。

その後、大学院博士課程に進学した25歳のとき、斎藤の研究室を訪ね、「何とか弟子にしていだけないでしょうか。授業を自由聴講させてください。何でもします」とお願いしました。それ以来、週に3回、4回ほどのペースで授業に通い、結果的に約10年間、斎藤先生のもとで学び続けることになりました。当時取ったノートは、今も15冊残っており、私にとって非常に貴重な財産です。今でもそれを読み返すと、新しい研究の発想が次々と湧いてくるのです。

資料に語る

伊藤 ということで、これまで斎藤正二の思い出を中心に、ずいぶんと話してきましたが、ここからは本題に入りたいと思います。斎藤正二以前と以後とで、牧口常三郎研究は何が変わったのか、あるいは斎藤正二からどのような研究上のヒントや方法を得たのか。ご自身の研究に引き寄せてでも構いませんし、牧口研究に直接結びつけてでも結構ですので、ぜひお話を伺いたいと思います。まずは塩原さんからお願いできるでしょうか。

塩原 斎藤先生以後の牧口研究という点で、まず触れておきたいのは、『牧口常三郎全集』に未収集の論文などを最初に見つけたのが、実は創価大学の学部4年生だったという事実です。それも斎藤ゼミに所属していた山口徹さん（23期生）という学生が、卒業論文の準備過程でさまざまに調査を進める中で、牧口先生の論文のうち、全集に収録されていないものがあることに気づきました。確か7本ほどだったと思います。その後、彼は必死に各地の図書館を巡り、見つけるたびに斎藤先生に報告し、さらに創立者にも報告するということがありました。若い学生が新たな研究の道を切り拓くという事実には、私は大変な驚きを覚えました。

もう一つ重要な例として、牧口先生の『人生地理学』が中国語に翻訳されているという話は、以前から噂としては知られていましたが、具体的な書誌情報は不明でした。その存在を突き止めたのが、本学出身で当時首都大学東京（現・東京都立大学）大学院生だった松田大作さん（23期生）という方です。「このようなタイトルの本があり、ここに牧口先生の翻訳が含まれている」という情報を見つけてくれました。その後、創価大学の先生方の尽力によって、中国の大学や図書館に所蔵されている牧口先生の翻訳書を実際に確認することができました。

こうした学生や若い研究者が新たな道を切り拓いていく姿に、私は大きな感銘を受けましたし、まだまだ私たちがやるべきことは多く残されているのだと実感しました。それ以来、私自身も国会図書館をはじめ、全国各地の図書館を回りながら、これまで見つかっていなかった牧口先生の著作を探し続けてきました。

『評伝 牧口常三郎』には、他の評伝とは異なる特徴があります。それは、巻末に牧口先生の著作一覧を掲載するだけでなく、全集に未収録の著作についてはアスタリスクを付し、「これだけの未収録文献が存在する」ということを明示した点です。さらに、存在が知られており、タイトルも判明しているものの、現物が未発見の著作があることも分かってきました。そうした文献については、私自身が見つけれられたものもありますが、限界もあります。そこで、後進の研究者や学生の皆さんにぜひ挑戦していただきたいという思いから、「未発見リスト」、いわゆる指名手配リストという形で掲載しました。評伝巻末の「未発見リスト」をコピーしていただき、もし発見できたなら、それは極めて大きな前進になります。ぜひ多くの方に挑戦していただきたいと思っています。

もう一つ、斎藤先生からいただいた言葉として、皆さんにぜひ紹介しておきたいことがあります。先ほども申し上げましたが、私は正規の意味で学者の道に進んだわけではありません。それでも牧口先生のことが大事だと思い、調査研究を行い、その成果を創立者に届けてきました。あるとき、創立者が「これは学術雑誌に載せたらどうか」と提案して下さったことがあります。しかし、その学術雑誌の担当者からは、「学者が書いたものではないから論文ではない」と、冷たく言われてしまいました。

そのことを斎藤先生に報告したところ、先生は一貫して「資料に語らせろ」という言葉を私にかけてくださいました。「君は職業は学者ではないかもしれない。しかし、資料に語らせていけば、事実は事実として積み上がる。それによって人を納得させることができる」という、極めて明確な方法論を示して下さったのです。この言葉があったからこそ、『評伝 牧口常三郎』、そして『評伝 戸田城聖』を執筆することができました。

現在は、教育雑誌『灯台』で連載をしています。『評伝 牧口常三郎』は、どうしても分量が多く、細部まで書き込んだ本になっていますので、より分かりやすく、シンプルな形で学んでいただけるようにという思いで執筆しています。また、現在取り組んでいるもう一つの挑戦として、牧口先生を高く評価していた人物である新渡戸稲造に注目し、「新渡戸稲造と牧口常三郎」という長編論文を、新渡戸稲造研究の書籍に3回連載という形で掲載しています。

こうした仕事を通じて、牧口常三郎という人物が、決して宗教界にとどまる存在ではなく、日本において極めて大きな思想的・教育的意義を持つ人物であることを、微力ながら伝えていきたいと考えています。学生の皆さんにも、ぜひさらに努力を重ね、多くの人々に、日本の貴重な財産とも言うべき牧口常三郎の思想と業績を紹介していただければと、心から願っています。

教育批判・教育学批判

伊藤 少し補足しておきます。先ほど塩原さんが触れられた、牧口常三郎全集に未収録の論文を発見した山口徹さんですが、彼は私の一学年下の後輩になります。山口さんが斎藤ゼミに所属していて、あるとき私に「絶対に斎藤正二の授業は取った方がいい。目から鱗が落ちる」と強く勧めてくれました。それで誘われる形で授業に行ったのですが、結果的には大正解でした。今で言えば、まさに「推し活」ですね。山口さんの“推し”に導かれた形でした。それでは次に、牛田さん、お願いします。

牛田 そうですね。私も、たしか古本屋で斎藤先生にお会いしたことがあります。新書を熱心に漁っておられました。

斎藤先生というと、非常に立派で清廉潔癖な人物像を思い浮かべる学生さんも多いかもしれませんが、実際にはかなり型破りな方でした。無謬的で近寄りがたい存在というよりは、極めて個性的な研究者だったと思います。先生は、私自身の研究にも大きな影響を与えています。

斎藤先生は、「教育学者でありながら、教育を信用していない」という点が、私にとっては最も衝撃的でした。普通、教育学者になると、「どうすれば人をよりよく教育できるか」「教育が目指す理念とは何か」といったように、教育を基本的に「善いもの」だと前提にして思考を始めます。しかし、斎藤先生はまったく違っていました。教育そのものは、決して無条件に善いものではない、という地点から思考を始める人でした。

これは私にとって、そして教育学そのものにとっても、極めて重要な視点だったと思います。経済を全面的に疑う経済学者がほとんどいないのと同じで、教育を根本から疑う教育学者も、ほとんどいません。その姿勢が私の中に強く残っています。なぜ斎藤先生が教育を信用しなかったのか。この点については、伊藤先生のほうが詳しいと思いますが、端的に言えば、戦中世代であったことが大きいと思います。教育と国家が結びついたときに、どのような事態が起こったのか。その記憶が消えることなく、先生の身体に刻み込まれていたのだと思います。

私は斎藤先生の最後の著作『牧口常三郎の思想』をここに持ってきました。この書籍は、伊藤先生が中心となって編まれたものです。伊藤先生はご自身ではあまりおっしゃいませんが、正直に言って、伊藤先生がいなければ成立しなかった本だと思しますので、ここではつきり申し上げておきます。

先ほど岩木さんが触れた最終講義の話とも関係しますが、斎藤先生は同著の中で、ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』を引きながら、教育について語っています。教育とは何かという問いに対して、私なりに単純化してまとめると、先生は、教育とは人間の三大欲を超えた欲求なのだというのです。人は教育を通して、相手が自分の思いどおりに変わったとき、強烈な快感を覚える存在なのだ、と。その言葉を自分自身に引きつけて考えたとき、私は強

い衝撃を受けました。

人を教育し、その力で人が変わる。このときに得られる快感は、もしかしたら食欲・性欲・睡眠欲といった三大欲を超えるほどのものなのかもしれない。そしてそれは、権力欲そのものでもあるという。こうした認識は、私に決定的な転換を迫るものでした。教育を考えると、あるいは牧口常三郎が教育をどのように考えていたのかを考えると、この問題は確実に地続きになっていると思います。私は現在52歳ですが、この言葉はいまも鮮明に記憶に刻まれています。これが、私の研究の源泉の一つです。

斎藤先生のお話を聴きながら、本当にそうだなと思って「なるほど」と言うと、叱られたことがありました。先生によると、『なるほど』の後には『しかし』が続く。『しかし』の後を言うための言葉だ』『なるほど』は、相手を否定するための準備となる言葉にすぎない。「だから、私の話に感心した顔で『なるほど』と言ってしまうのは誤りである」と指摘されました。

さらに、数字の「七」を「なな」と言ったときに叱られることもありました。「七」は「しち」が本来の読み方だと、その場で辞書を引くように促され、「しち」の意味を解説いただきました。斎藤先生は、言葉に対する感覚が非常に鋭く、文章表現にしても、ある種の芸術性があったように思います。

いま挙げたエピソードは、まるで冗談のように思えるかもしれませんが、私にとっては、懐かしい叱られた思い出であると同時に、言葉の厳密性への姿勢として、深く根付いています。それはもちろん、「教育とは権力欲の発露である」という根本的な命題とも、私の中で結びついて残っています。

伊藤 斎藤は1925年生まれの戦中世代として、戦時中の軍国主義教育の記憶を、学問的にも背負っていました。戦争が終わった20歳の時点で、家族を失い、深い苦しみを味わっていた。そのような背景があったからこそ、斎藤は、牧口常三郎が牢獄で亡くなったという事実、強い衝撃を受けたのだと思います。

私は以前、「なぜ斎藤先生は牧口研究を始めたのですか」と尋ねたことがあります。この質問は、斎藤自身もよく受けていたようです。もともと斎藤は、柳田國男、折口信夫、新渡戸稲造といった研究者の仕事に取り組んでいました。彼らは「郷土会」と呼ばれるグループを形成し、生活空間を社会学者がチームで研究する、今日で言う社会学やフィールドワークの先駆的な共同研究を行っていました。

この郷土会を主宰していた柳田國男や新渡戸稲造が、牧口常三郎をその活動に誘っていたのです。斎藤正二が柳田や新渡戸の研究を進める中で、郷土会の資料を精査していくと、毎回、著名な知識人たちに混じって一人、「正体不明」の人物が参加していることに気づきます。それが牧口でした。

そこで斎藤は、「牧口常三郎とは何者なのか」と考え、古本屋に「牧口の本が見つかったら知らせてほしい」と依頼します。そうして最初に手に入ったのが『人生地理学』でした。

1903年10月に刊行されたこの本は、日露戦争直前の、日本全体が反露感情に煽られ、戦争へと突き進もうとしていた時代に書かれています。その中で牧口は、「世界民」という言葉を用い、世界を公平に認識する視点を提示していました。斎藤は「1903年の段階で、これほどベラルで平和主義的な思想家がいたのか」と、まず強い衝撃を受けたそうです。

その後、再び古本屋から連絡が入り、次に見つけたのが『創価教育学体系』でした。戦後、日本で爆発的に拡大した宗教団体・創価学会の創始者、そして獄中で亡くなった牧口常三郎。その人物と、『人生地理学』の著者が同一人物であることを知り、斎藤は再び、衝撃を受けたと言います。そして「この牢獄で死んだ思想家を、自分の人生をかけて、きちんと再評価しなければならない」と決意したのです。

山口さんの話によれば、斎藤自身が、この思い出を語るときには、眼鏡を外すジェスチャーをして（『人生地理学』と『創価教育学体系』を知って）「二度、目が飛び出るほど驚いた」と話していたそうです。

論文のスタイル

伊藤 それでは、研究の側面について、岩木さんからもぜひお願いします。

岩木 私の場合は、大学で斎藤先生から直接教えるを受ける機会は、それほど多くありませんでした。そのため、主として論文を読みながら学んだという形になります。ただ、その斎藤先生の論文には、言葉では言い尽くせない魅力があります。引用が非常に多いのも特徴で、一般的な学術論文の形式からすると、「引用が長すぎる」と言われるかもしれません。しかし、読む側の感覚としては、論文を読んでいるというよりも、斎藤先生の講義を受けているような感覚になるのです。

実際、私は斎藤先生の論文を図書館で集め、自分で製本してまとめていました。論文を読みながら、まるで語りかけられているような感覚を覚えたことを、今でもよく覚えています。その中でも、先ほども触れた「二育・三育論」は、私にとって本当に衝撃的でした。何度も言いますが、まさに「目から鱗が落ちる」体験でした。

教育をいくつの領域に区切るのかという問いに対して、「そもそも、その区分にはどのような根拠があるのか」という点を、斎藤先生は徹底的に説明してくれます。そして、その背後には歴史的・思想的な背景があるのだということを、丁寧に語ってくれる。そのこと自体が、非常に衝撃的でした。教育というものは、実はかなり恣意的で、ある時代の慣習や支配的な考え方によって形づくられているのではないか、という認識を強く持つようになりました。

私自身、この二育・三育論文に大きな影響を受け、研究の出发点も、斎藤先生の方法に強く依拠しています。私が着目したのは、「被教育者」という概念でした。子どもや若者は、「児童」「生徒」「学生」など、さまざまな呼称で区分されていますが、明治近代の初期には、基本的にすべて「生徒」と呼ばれていました。それが、ある時点から「生徒」と「学生」という呼称に分離していきます。では、この分離はいったい何を意味しているのか、その原因は

何なのか。そこを突き詰めていったのが、私の修士論文のテーマです。

調べていくと、明治前半期において、この分離が生じていることが分かってきました。一つには、軍学校の影響があり、もう一つにはフランス語圏の教育制度の影響があって、「学生」という用語が導入されたという背景があります。さらに、東京大学では明治14年頃から「学生」という言葉が使われるようになりますが、そこには初代総長である加藤弘之の進化論的な思想が関係しており、「学生」という呼称が、ある種の自己規定的な尊称として与えられたのではないかと、という見解に至りました。この発見の過程は、非常に刺激的で、研究の楽しさを強く実感した経験でもあります。

そして次に、「では教師側はどうなのか」という問いが浮かび、それが博士論文の発想へとつながっていきました。このように振り返ると、斎藤先生の研究や論文は、私の研究スタイルそのものを形づくり、進むべき方向を示してくれた存在だったと、あらためて感じています。

また、修士論文を完成させた際には、自分で製本したものを斎藤先生にお送りし、読んでいただきました。返却された論文には、下線やコメント、「ここは正しい」「これはどうだろう」といった丸や三角の印が、細かく書き込まれていました。そのときは、本当に嬉しくて、「どうしてここまでしてくださるのだろう」と、泣きながら受け取ったことを覚えています。思い出しても、胸が熱くなります。それまで、これほど丁寧に向き合ってくれる人に出会ったことはありませんでした。

研究者としての斎藤正二という側面ももちろん大きいのですが、私にとっては、直接授業を受けた回数が少なかったからこそ、「教育者としての斎藤正二」という存在を、より強く考えさせられたのだと思います。その意味で、私は計り知れない恩恵を受けてきたと、実感しています。

創立者との交流

伊藤 斎藤は、多摩地域の作文コンクールで長年、審査員・選考委員を務めました。40年ほどにわたり、入選作品すべてにコメントを付されています。中学生の作文も、一つ一つ丁寧に読み、温かい言葉をかける、非常に優しい方でした。

非常に印象的なこととして記憶に残っているのは、私が26歳のとき、大学院博士課程に進学し、改めて斎藤正二の門を叩いた際のことです。牧口常三郎の『創価教育学体系』の冒頭には「産業合理化」という言葉が出てきます。これは本来、経済学の用語です。私は「なぜここで経済学の『産業合理化』という言葉が出てくるのですか」と斎藤に尋ねました。すると、「来週まで待ちなさい」と言われました。

翌週、斎藤は数十冊の本を抱えて教室に来ました。「1930年前後の日本で、『産業合理化』という言葉は、この著者のこの本ではこういう意味で使われている」「こちらの著者では、こういう文脈で使われている」と、当時の言論空間を一つ一つ再現してみせてくださったの

です。そのうえで、座標軸を組み直し、「このあたりに牧口常三郎の主張が位置づけられる」と推測していく。まさに圧巻でした。

その方法論が最もよく表れているのが、『牧口常三郎全集』所収の『人生地理学』に付された詳細な注釈です。そこには、「この著者のこの本では、この語はこういう意味で使われている」といった形で、徹底した資料提示がなされています。その中で、牧口常三郎が当時の日本社会において、どの位置に立っていたのかが、立体的に浮かび上がってくるのです。

私はここが非常に重要だと思っています。斎藤正二という人は、晩年に創価大学の教授になりましたが、それ以前から一貫して、非創価学会員の牧口研究者として、牧口常三郎を徹底的にアカデミックに、学術的に研究してきました。そのおかげで、牧口は、単に宗教的観点から捉えられる存在ではなく、日本近代の政治史・教育史、さらには哲学史においても再評価されるべき思想家として位置づけられるようになったのです。

もちろん、創価大学の中には、信仰に篤い学生が「先生は、なぜ創価学会に入られないのですか」と率直に問いかけることもありました。斎藤正二は、もともとキリスト教の家庭に生まれ、青春時代に多くの遍歴を重ね、最終的に学問の道を選んだ人です。だからこそ、信仰を持つ人の気持ちも理解していました。しかし、特定の立場に立ってものを書くのではなく、複数の視点から対象を捉える学者として仕事をした。その姿勢があったからこそ、牧口は一宗教団体の創始者という枠を超え、日本の軍国主義・国家主義と真正面から対峙した巨大な思想家として浮かび上がったのだと思います。

私にとって、斎藤正二の人生と仕事は、計り知れないインパクトを持っています。彼は『牧口常三郎全集』を全巻編集しました。また、斎藤の主要著作を納めた『斎藤正二著作選集』の刊行が決まったときのことも、よく覚えています。当時、先生は75歳前後で、まさに晩年でしたが、その業績が改めて高く評価され、出版社が刊行を決断しました。

その1冊目（第6巻『「やまとだまし」の文化史』）が刊行された際、斎藤は「私は創価大学で長くお世話になった。ぜひ、この本を創立者の池田先生に捧げたい。伊藤さん、届けてくれますか」と言われました。そこで私は、斎藤の書簡とともに、著作選集をお届けしました。すると間もなく、創立者の秘書の方から電話があり、創立者が大変感動されて、ぜひ斎藤先生に次のように伝えてほしいとの伝言がありました。

「お手紙をありがとうございます。涙が出ました。どうかお身体を大切にしてください。」

さらに、創立者の最新刊の写真集に揮毫されたものを斎藤先生に贈りたいので、届けてほしいとのことでした。その写真集には創立者の直筆で「大徳敦化」という言葉が記されており、現代語に訳せば「偉大な徳を備えた人は、世界に影響を与える」という趣旨の言葉でした。私はその文字を、今でもはっきり覚えています。

また、斎藤正二が75歳で創価大学を定年退職された際の卒業式のことも忘れられません。当時は創立者が卒業式に列席されており、名誉教授称号の授与式において、創立者が自らの手で斎藤に称号を授与されました。こうしたシーンは、私が出席した創価大学の行事でもほ

とんど目にしたことはありません。そのとき、さすがの斎藤も感極まって涙を抑えきれなかったそうです。あまりに感動して、対面ではお礼を言えず、後日手紙で感謝を伝えた、というやり取りがあったことも覚えています。

私自身の人生を振り返っても、学問というものは、厳しく育ててくれる人がいなければ成り立たないのだと、強く感じます。30年前、「牧口研究」という分野は、ほとんど存在していませんでした。「創価教育論」という授業もない時代です。

その中で、日本教育史学会などの学術の場で牧口研究を正面から発表し、論文として積み重ねてきたのが、斎藤正二をはじめとする研究者たちでした。彼らの努力があったからこそ、今日、牧口を学術的対象として研究することが可能になっています。その貢献の大きさを、改めて強調しておきたいと思います。

膨大な蔵書

伊藤 このあと質疑応答に入ろうと思いますが、その前に皆さんから何か言い残したことがあれば、この時間をつないでいただければと思います。

塩原 では、斎藤先生のご自宅や奥様について、少しお話ししたいと思います。斎藤先生の蔵書は、本当に並外れたものでした。一軒の家が、天井近くまで本で埋め尽くされていたのです。さらに、お風呂場までもが本で埋まり、通路すらない状態でした。最初に蔵書整理を始めたときは、まず通路を確保するところから取りかからなければならぬほどでした。斎藤先生がお持ちだった本の数は、おそらく数万冊を超えていたのではないかという印象があります。膨大な読書を基盤に、さまざまな学問を構築してこられた方なのだと、あらためて実感しました。

蔵書整理でご自宅に伺っていた際だったと思いますが、奥様が、ふとこんなことをおっしゃったのが印象に残っています。「主人の恋人は牧口先生なのです」と。冗談めかした言い方ではありましたが、その一言に、斎藤先生がいかに牧口常三郎を心から尊敬し、その研究に人生を捧げてこられたかが凝縮されているように感じました。牧口先生への深い敬意を土台に、多くの学問的成果や文章を生み出してこられたのだと、強く思わされました。私にとって、斎藤正二は本当に尊敬すべき大先輩であり、大きな偉人でした。

伊藤 蔵書があまりにも増えたため、もともとの家の横に新しい家を建て、ご夫妻はそちらに移られました。奥様はよく、小さい方の家にご夫婦が住み、元の家はほぼすべて書庫になってしまった、と笑いながらおっしゃっていました。

その後、牧口常三郎研究の資料などを寄贈して下さるお話があり、現在では「斎藤正二文庫」として、創価教育研究所に所蔵されています。その資料整理のために、塩原さんや岩木さんと何度もご自宅を訪れました。そのたびに、奥様はお茶菓子を出して下さったり、時には食事まで用意して下さったりしました。

斎藤正二は30年以上、闘病しながら研究を続けられたので、奥様の献身的な支えがあり、

まさに二人三脚で研究が進められていたのだと思います。そのことへの感謝の気持ちも、今あらためて思い起こされます。

岩木 私も大学院生の頃、その蔵書整理に関わらせていただきました。和風建築の家の中に、本が本当にぎっしり詰まっていて、結局、廊下から少しずつ本を出していく以外に方法がありませんでした。通路を確保するのが精一杯だったと思います。それでも、数万冊という規模で、本当に本に人生を投資されていたのだと感じました。

その影響か、私自身も自分の部屋に本を置くことへのリミッターが外れてしまい、いくらでも本を置くようになってしまって、今でもよく叱られています（笑）。

もちろん、斎藤先生が蔵書の一冊一冊を最初から最後まで読まれていたわけではないと思いますが、興味深いのは、同じ本が何冊も出てくることでした。そして、それらを見比べると、付箋の位置や書き込み、線を引いている箇所がそれぞれ違うのです。同じ本を、異なる関心や問題意識のもとで何度も読み返していたのだと思います。徹底した読書と書き込みを通じて、思考を深めていく研究スタイルだったのだと感じました。

蔵書整理の作業を通じて、斎藤先生の研究の方法や読書の姿勢が、自然と伝わってきました。作業自体もとても楽しく、ひと段落すると、斎藤先生と懇談する機会をいただき、さまざまな質問をすることができました。今思えば、少し失礼な質問をしたこともあったかもしれませんが、その場で牧口常三郎研究や、斎藤先生ご自身の研究について、直接話を聞くことができました。期間としては2～3年ほどだったと思いますが、私にとっては本当に貴重で、ありがたい時間だったと、今でも強く感じています。

質疑応答

伊藤 現在、学生の皆さんからフォーラムにいくつか質問が寄せられています。1つ目は、「斎藤先生は若い頃、何を専攻されていたのか」という質問です。

斎藤正二は、文学部を卒業していますが、いわゆる専門分野に早くから閉じこもるタイプの研究者ではありませんでした。20歳前後という非常に若い時期から、すでに評論家として活動しており、学問と評論の両面で頭角を現していました。

具体的には、斎藤茂吉という著名な歌人の門下に入り、短歌評論家として学問的なキャリアをスタートさせています。その後、美学研究へと関心を広げ、カンディンスキーをはじめとする、当時の日本ではまだ十分に評価されていなかったヨーロッパ近現代の芸術家や思想家の著作を、原語で読み、紹介していきました。ドイツ語・フランス語・英語など多くの言語文化を自在に行き来して翻訳・研究を行っていた点は、特筆すべき特徴です。

さらに、日本の古典にも深い造詣を持ち、『古事記』の現代語訳にまで取り組んでいます。このように見てくると、斎藤正二は、単一の専門領域に収まる研究者ではなく、文学・美学・教育学・思想史を横断する、きわめて稀有な知の実践者でした。私自身の率直な印象を言えば、斎藤正二は、まさに「現代におけるレオナルド・ダ・ヴィンチ」のような存在だったと

思っています。

次に、質問の2つ目ですが、「『創価教育学体系』を少し読んだけれども、昔の専門用語が難しく読めない」という点と、あわせて「良書と悪書はどのように線引きされるのか」という問いです。どなたか回答をお願いします。

牛田 ご質問にある通り、『創価教育学体系』が非常に難解だというのは、率直なところ本当だと思います。ただ、難しいと感じてなかなか読み進められない場合には、一人で抱え込まず、仲間とみんなで読むという方法が有効だと思います。

創価大学には、私が学生だった頃からそうなのですが、インフォーマルな読書会があまり多くないと感じてきました。難しい本ほど、数人で集まって音読してみる、あるいは読む箇所をあらかじめ決めておいて、各自読んできたうえで議論する。そうしたやり方がとても大切だと思います。私自身も、今でもそうしています。「これは一人では挫折しそうだな」と感じる本については、研究者同士で読書会を開いて、読書に挑戦するようにしています。

良書と悪書の区別については、伊藤先生がお話しされた方がよいかもかもしれません。私から言えることは、良書か悪書かは、実際に読まなければ分からない、ということに尽きるということです。大事なものは、読んでいくプロセスで、「なぜ違和感を持ったのか」「どうして心に引っかかるのか」「これはどういう点が良いのか」といった感覚や問いが、自分の中で少しずつ育っていくことにあります。そうやって、書物に対する鑑識眼が養われていくのだと思います。

絵画でも音楽でも同じで、たくさんの絵や曲を見て、聴いている人は、「これはよい絵画だ」「よい曲だ」などと、何となく自分なりの判断ができるようになることがあります。最初からそうした判断がうまくできるわけではありません。結局のところ、そうした力は、多くの作品に触れることで、その意味では時間をかけて培われるものです。その意味では、いわゆる「古典」と呼ばれるものは、長い時間を経て人々に読み、聴かれ、鑑賞され続けてきたという事実があるのですから、そうした力を身につける参照先として、有意義なのではないかと感じています。

伊藤 3つ目に、「牧口先生のあらゆる教員人生を通して、一番大切にされてきたことは何だったであろうと思いますか。牧口先生は明治26年に単級教室を担当されていますが、その時のことを詳しく知りたいです」という質問がありました。塩原さん、いかがでしょう。

塩原 そうですね。最初に2つ目の質問に触れておくと、『創価教育学体系』を読むのは確かに難しいですし、『人生地理学』も同様に難しいと思います。現代語訳も出ていますが、正確に現代語に置き換えること自体が、非常に難しい作業だと感じています。

私自身が『評伝 牧口常三郎』を書こうと思った背景の一つには、まず牧口先生がどのような問題意識を持ち、どのような行動を重ねてきたのか、その流れを理解してもらいたいという思いがありました。その流れをつかんだうえで『人生地理学』を読み、さらに『創価教育学体系』に進んでいくと、比較的スムーズに入っていけるのではないかと考えたのです。

また、『体系』という書物は、牧口先生の思考が完成されたものというよりは、思考が発展し、深化していく過程の中に位置づけられるものだと思います。牧口先生が、どのように考えを積み重ね、変化・成長させていったのか、そのプロセスを押さえることが、理解の鍵になるのではないのでしょうか。

「単級教室」について言えば、これはまさに、恵まれたとは言えない教育環境の中で、どうすれば子どもたちが本当に楽しく学べるのかを探求した実践だったと思います。先日、教育者の勉強会で「牧口先生は『楽しくなければ創価教育ではない』と言っていた」という話をさせていただきましたが、改めて根拠を確かめたいと思って調べてみました。すると、昭和16～17年頃の発言の中に、「児童にわかりやすく、たのしく、能率的な授業でなければ、創価教育とはいえない」という趣旨の言葉を話されていたという証言が見つかりました。

牧口先生の単級教室の実践も、どのような環境に置かれた子どもであっても、その子どもたちが学ぶことを楽しいと感じ、すっと理解できるようにするにはどうすればよいかを、徹底的に考え抜いた営みだったのではないかと思います。その点において、単級教育は、牧口教育の原点の一つを示しているのではないのでしょうか。ただ、この点については、岩木さんにぜひ専門的なお話をお願いしたいところです。

岩木 難しい問いですね。『創価教育学体系』が難しいという点についてですが、私自身の読み方としては、最初からすべてを読み切ろうとしない、ということ大切にしています。まずは目次や章タイトル、見出しなどを眺めて、「この本のどこに、だいたいどのような内容が書かれているのか」という全体の地図をつかむようにします。そうすると、たとえ全部を理解できなくても、「このテーマはこのあたりに書かれている」という見当はつくようになります。

そのうえで、「ここだけはどうしても知りたい」「このテーマは気になる」という箇所を一つ見つけ、そこを徹底的に読む。私自身も、研究ではよくこの方法をとっています。ただし、その部分を本当に理解しようとすると、どうしても前後の文脈を読まざるを得なくなり、さらに背景となる思想や時代状況も必要になってきます。結果的に、そこから少しずつ読む範囲が広がっていく、という形です。キーワードやキーワードを手がかりに読み進めていくことが、とても重要だと思います。

次に「単級教室」についてですが、「単級学級」という形態は、明治30年頃までは、日本の学校では比較的一般的だったようです。一人の教員が、複数学年、場合によっては全学年の子どもたちと一緒に教えるというスタイルです。そこでは、家族に近い関係性が生まれやすく、教員が親のような存在になり、生徒同士も兄弟姉妹のような関係になると言われています。

興味深いのは、年上の子どもが年下の子どもの面倒を見るという関係が自然に生まれる点です。現代のように、同学年の子どもたちが一斉に同じ内容を学ぶクラス編成とは異なり、年齢の異なる子どもたちが一緒に学ぶため、過度な競争や対立が起こりにくいという特徴も

あります。また、年上の子が年下に教えるだけでなく、年下の存在があるからこそ、年上の子が「しっかりしよう」「頑張ろう」とする側面もあったとされています。

牧口常三郎が「単級教室」そのものを専門的に研究していたかということ、必ずしもそうではありません。彼は、自らが経験した教育実践を語り、その中で得た気づきを理論化していった教育者でした。ただ、研究として「単級教室」に関する論考も残していますので、牧口がこの教育形態をどのように捉えていたのかについては、そうした資料を参照するとよいのではないかと思います。

伊藤 次に4つ目の質問です。「もし斎藤正二の研究を、現在の教育実践に応用するとしたら、どのような点が活きると思いますか」という問いです。岩木さん、いかがでしょうか。

岩木 まず前提として、「斎藤正二研究」そのものを、私たちがきちんと行っていく必要があるのではないかと感じています。

その点で言えば、伊藤先生がすでに先鞭をつけてくださり、「斎藤正二による牧口常三郎研究」というテーマを、体系的に整理し、提示してくださっています。今後は、それを引き継ぐかたちで、私たちが斎藤正二の研究をさらに深めていくことが求められているのだと思います。

その際には、斎藤正二を研究者として捉える視点と、教育者として捉える視点の両方を、丁寧掘り下げていくことが重要ではないでしょうか。その二つを切り分けるのではなく、相互に関係づけながら検討していければと考えています。

伊藤 斎藤正二の論文や著作を読むと、何よりもまず感じるのは、牧口常三郎の言葉を、徹底して「聞き取ろう」とする力です。これは、現在の教育用語で言えば、「傾聴力」と呼ばれるものだと思います。斎藤は、40年にわたって多摩地域の中学生作文コンクールの審査員を務めていましたが、その際にも、単に評価を下すのではなく、「この作文のこの一節が一番よかった」と具体的に引用し、そこにコメントを添えていました。これはまさに、書き手の声を丁寧に聞き取ろうとする姿勢の表れです。

私は、現場の教育も、過去の思想家や哲学者の研究も、本質的には同じだと考えています。つまり、相手が発している言葉やメッセージを、どのように聞き取り、受け止めるのかという点に尽きるのではないのでしょうか。そのためには、受け手である私たち自身の「感度」を高めていく必要があります。そうでなければ、真の相互作用は生まれません。

斎藤正二という人は、牧口常三郎の言葉や思想に対しても、徹底した傾聴の姿勢で向き合い続けました。そして、その姿勢は、中学生の作文に向き合うときにも、まったく同じ形で貫かれていたのだと思います。その点こそが、斎藤正二の研究を、現代の教育実践に活かすうえで、最も重要な示唆ではないかと考えています。

最後に、5つ目の質問です。「現代の創価大学において、斎藤正二は何を考えるとするか」という問いです。牛田さん、いかがでしょうか。

牛田 この機会に、ぜひ学生のみなさんにお伝えしたいことがあります。斎藤先生は、私たちに

「頑張るな」と繰り返していました。これは、今回の質問への回答とも関係しています。

正直に言えば、当時の私は、「頑張る」ということは、創価大学の文化的な価値観として、とても大切にされてきたものではないか、と感じていました。今でも、そう感じています。しかし、斎藤先生は「頑張る」という言葉を肯定してはいませんでした。

斎藤先生は『広辞苑』を紐解いて、「頑張る」という言葉の意味を説明されました。「頑張る」は「我を張る」に由来する、というのです。相手の意見に耳を貸さず、自分の考えに固執し、どうにかそこに踏みとどまることを指します。こうした由来をもつ「頑張る（我を張る）」に、先生は強い違和感を持たれていました。

それでは、「頑張る」の反対の言葉は何か。それは「諦める」です。「諦める」というと、投げ出す、断念するという残念な意味で受け取られがちですが、本来の「諦める」は「明らかに（あきらむ）」であり、「物事を明らかに見る」「冷静に状況を見定める」という意味を持っています。

斎藤先生が「頑張るな」と言ったとき、それは「何も考えずに、状況を見極めないまま、自分の思いや信念、あるいは意地によって、不合理なことを押し通してはならない」という戒めだったのだと思います。感情や思い込みを、信念や思いといった美しい言葉で塗装し、それをより所に判断するのではなく、事態をよく観察し、冷静に考え、その上で判断せよ、ということです。

その意味で、「頑張るな」という言葉の裏には、「よく見よ」「よく考えよ」「頭を使え」という、非常に厳しくも、また大事なメッセージが込められていたのではないのでしょうか。「頑張るな」。これは、現代の創価大学も、広くは社会一般も、思いを致すべき言葉だと思っています。

伊藤 ありがとうございます。それでは、時間となりましたので、ここでシンポジウムを終えたいと思います。

本日のシンポジウムを通して改めて感じたのは、学問とは知識を蓄積する営みである以前に、人の言葉に耳を澄まし、時代の声を聞き取ろうとする姿勢そのものだけということです。斎藤正二が生涯をかけて示してくれたのは、牧口常三郎という思想家の再評価であると同時に、学問と教育に向き合う際の一つのモラルだったと言えると思います。今日の議論が、皆さん一人ひとりにとって、自分自身の問いを深め、これからの学びを考え直す小さな起点となることを願って、本日の結びとしたいと思います。

多くの貴重な話をしてくださった塩原さん、牛田さん、岩木さん、本当にありがとうございました。